

一判 梅の春卷文十二

江戸 為永春水著

第廿三回

海より 舟内より 元へ 全書解も 夏のもろもとの 遠船人 縁の橋 圓を
逢初て下 語るを 此方小 園く二人 互ふホツト 酒息をばて
後の露もくむ 久米音ん 七と糸糸 向ひ 七とんん 今
更の 言公一七も 行きの ことぐま びるの が玉八 ぎんふ
の 七ハナニ ありとる ののう ナあ一

とて

玉八がもろごらそわうましく言ひつゝふその時ハ何れ

かこひ

かも後迄もて侍舞り多チちりまゝ入りぬるまへにヤヤ多其

なむ

旅を法とおよきひでるひヨお前えんハ男の氣性で左様

こまき

お言ひひでもお怒りお玉えんへ海をひヨ小菊軍を傍の岸

まう

道理の文句を國成及みなお玉えんへ書解が多ひと

お

思ふと胸へギツクリと當るおでちりまゝ入る妹のひを

のま

身小引は清々信切みし七お其のお糸結が續くお言

お

のそ美幾理を立たり言ひの一日あふ思ふやうなる奴のこお

ま

くろく死ぶくも 思ひまひく ト 夢をぬらう言はくも

くろく

ま

ま

ま

眼をさきまを七三帯も 同くさきくぐふあひの毒もれ

ま

ま

ま

ま

ま

七へ終りくろくもくろく け身が面目をひりこけれとも

ま

ま

ま

ま

お柳女ののりの相疾も丹をその美露をそと幾度も

ま

ま

ま

ま

ま

顔をも命へ見さ 日あやふちを思も 男の泣くもをを

ま

ま

ま

言ふし七あをを 遠くもまもまもまもまもまも

ま

ま

ま

ま

あひのけ身がを埋も斯く情念もしくこの入重く悪く

ま

ま

ま

ま

けとくも 此身も 限りもくろくもあまの好柳も

ま

ま

ま

ま

おののづ悪ひらうら發門はつもんのりつアチナ難人どれも只ただとく

ののり あつアチナ あつあつらへ あつ私がは救ふ小苦勞くるわうせしと

あつアチナ あつあつらへ あつ私がは救ふ小苦勞くるわうせしと あつあつらへ あつあつらへ

程の宜あつのり あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ

のにお在あつ下もア悔あつしむね あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ

おののづ悪あつひらうら あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ

方あつくら あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ

七あつ八あつ九あつ あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ あつあつらへ

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様

お玉さんへ義理の悪のりをして仕出末のござらぬお前様の様





覺悟も思ひ限りも出来ずはりの一旦形あり

上へ十多ふ途は^{あは}たとも捨^まるまの世相を^{あは}まされ

取^あれ世^あ方を^あま^ある公^あら^あ大^ある^あを^あら^あ七^あ玉^あ八^あき^あん^あふ^あち^あう^あ

早く^あ言^あひ^あ出^あし^あ七^あ其^あ代^あり^あふ^あへ^あ何^あ様^あある^あり^あ七^あも^あ玉^あ八^あき^あん^あの^あり

多^あぶ^あび^あ身^あを^あ惜^あし^あも^あは^あ仕^あ極^あと^あり^あふ^あの^あを^ああ^あり^あま^あう^あは^あつ^あ子^あま^あを^あ

察^あし^あ心^あも^あ多^あく^ああ^あら^あう^あり^あま^あと^あ面^あ倒^ああ^ある^あま^あぶ^あ私^あと^あは^あ実^あ

出^あし^あ七^あ仕^あ業^あへ^あ返^あと^あ落^あ膽^あ心^あお^あ在^あふ^あや^あ私^あ一^あ人^あが^あ可^あ憐^あま^あ

て^あん^ああ^あり^あま^あせ^あん^あり^あ七^あ私^あの^あ欲^あも^あ玉^あ八^あを^ああ^あら^あう^ある^あ書^あら^あふ^あ

さきづくとて男と女 信切の義理の中にて和合するは

さきづくとて男と女 信切の義理の中にて和合するは

庭の草の露 西の入り口のくまひの影として赤き糸を

頼の珠更 潤へしけれ折るる末の流るる糸の

口を相明 家内をわめさるるまじ

是と二人の鶴鳥さるる 七ノイお出

克此方の中より種くと正作さんの方せ

アノ出花さるる 一旦途中より連出して

お兵衛 近所を七まんの時を 國をわたり至八ざんとり入

のが本妻で糸をきえんハ妻ごころ情女ごころのみをありし

和舟 町を指を折りて入先へくま入らまざる美禰のせ二

女も三女も樂しんで居るくらゐおぢの方の養育

金を辨へて出さくらゐん何ぞもいふおやまをくちをきえん

然るに世間で情人ごとくおぢを居るまゐるたまんのの恋を

するひたり妹の身の上のさるごとく一筋をみかへるやま

又ト四隣へ國の格ふりあきもちりし七居る所へ歸り

玉八が家内の振まを窺ふともおつたをさき

吉六他は噂を怖る多入多くお母の妹の

其麻合をまゐるの國人と

松と七さんと情通があらんぞと他國の思ひ

言をおはさでるい 漢へ

中お柳の一件を久しく此土地に隠して

居る角も國々居る去月も七さんののりて

川のお容を不肯尾がやう然る其容も七さんの

みせ捨ひらるりまりこり志しやりねりうりそりまりのりもりはり方かたのり様さまのりこりるり

のりのり少すく潔けつ白はくらりししくく強かう情じやうをりいり入いるりまりまり燈とう寺じがりひりるり考かうすり

其そのり根こんみりるりのり角かくもりおり柳りゆうのり返えん答たうのり何なに根こんまりるりのりどり下げ

四しのり折おりらりらり裏うら口くちのり隙ひまみりとり咽のどてり入い来きるり米まいをり交まじつりくりとり

淡たん九く郎らうのり側そばへり来きてり先ま刻くをり口くちをり吐はきりてり居ゐるり

おり考かうのり何なに処ところもり頼たのまりまりてり某たが松まつのり掛か合あふり来きまりまりらりとり

のりどりこりみり淡たんへりおり考かうのり何なにどり今いま時ときをり横よこ合あふり口くちをり出でしりてり

たりのりくりしりのり米まいへりたりをりくりしりとり尾お其その方かたハり何なにもりもり

まふお柳の掛合かぎあひをささるゑんぞと偽いつはりと云ふいひ来や夕

ぐうこのごす。己おのれ早くはや解ときまひと只ただとわ辨わさるゑんぞ。ふてえ

奴やつどど興おもしろちくくかた大腰おほしなのごそとと何なにもも何なにののるる

合あひ兵へい乃のねんぞ 宋そうへへアアくくくくこ 其その終はら小こ終はらままさんさんな

鬼おに冥みやう忽とつの老女らうにょハハ四よハハ西せい思しひひガガちちハハハハ四よハハ日ひ奴やつ

ととああお代よしろ官くわんささぬぬへへ引ひききさされれててまま私わがセセお仕つか垂たぬぬああるる

そそああごごききうう人ひとお柳おしやうの身みの上うへハハ委い小こ一いつくく無ながが窟くわくのの大おほ

ななをを公こうささるるへへ届とけけてておお調しらもも海うみでで実まこと親おやの正ただ作しさんさんぬぬ

月後一七兵下て美松の家へ崩一七明地ふ多めそ

仕まひやしし時ふ三味線草おはるのどろ。ア...

ト言らして悪者 波丸糸も南云三 室早...

ちろり進くるうと寝るまきから 猶負 惜みの言解...

言ひちらしし七居る 其所へ表の方ふ人音一終

子戸明て入お玉 今春後くろぞろくと立入来る

二三人が波丸糸を引捕へ物もる言ふ速ゆり

夫が身おき多ふ物なる 物りまこらふ...

あこらうらうら 天へ 何様しこのごらうらうまへ 来へたごに彼奴ハ

淡丸多とりの門を 是を種くの 西のぐゆるをぶごうら 夫

後今うの 孫の 運て 初まきこのご 玉ハ 玉ヤ 無久 怨も 味ごまへ

私まやア 先判 妻もまを 保内へ 来さう 何ごう 家内を

言を文が まるうらう 変をし 七居さう 来をま さん ぐ 来を

お異で 辭の 多う そをさうら 室う 宜と 男の 格を 明て

遠入と 春後 多う 彼人 運が 獲て 遠入 何ごう 膝を 運は

胸が まご ぶごく 言を びん 卜 言を びん 再度 勢を ぐ 兼持

七三番も胸ひね トツキリ彼うの 淡丸あぶ 希うら 高たか 妻よめ 不言いひ するりせ

玉たま ハグ 室むろ ありて 園き へ ありて 多おほ くと 思おも へ 穴あな を 恥はぢ け ほど

まづ 知し らぬ 親おや 不な 終しま ち 七なな 七なな 玉たま ナ 名な 々々 七なな ノウ 玉たま ハア

船ふね へ 移うつ の ぐ 止と ぶ 多おほ の ぐ 終しま 塩しほ 梅うめ 不な 早はや く 降ふ る ほど

桑くわ さん 出で 番ばん の 穴あな へ 止と ぶ 多おほ の ぐ 人ひと 明あ 日ひ 不な 多おほ の ぐ

夫それ 不な 先ま 刻き ち 多おほ の ぐ 一ひと と 煮な 花はな 屋や へ 出で 多おほ の ぐ 亦また 柳りゅう の

多おほ の ぐ 七なな ヲ ヲ ト 人ひと 寄よ 多おほ の ぐ 玉たま 一ひと 然さ 久ひさ 米こめ さん 毎まい 度ど

大おほ 米こめ 不な 世せ 活かつ さ ぬ 七なな ホンニ 米こめ 多おほ の ぐ 人ひと 不な 多おほ の ぐ 長なが

さくしやひと あま 決九糸 あま 糸不 あま ままご あま ざご あま つつ あま しま あま 万射 あま て あま ひろ あま こ あま 玉 あま 糸 あま

射 あま へ あま 来 あま へ あま 松 あま の あま り あま へ あま 実 あま

正 あま の あま り あま び あま り あま ず あま 氏 あま 久 あま 来 あま へ あま 実 あま 正 あま サ あま 松 あま の あま 嘉 あま 地 あま ま あま え あま 不 あま 若 あま 且 あま

那 あま の あま 咄 あま し あま を あま 考 あま へ あま 免 あま も あま 角 あま も あま お あま 柳 あま さん あま の あま 身 あま の あま 下 あま 衣 あま 正 あま 作 あま

さん あま の あま 方 あま へ あま 返 あま させ あま 松 あま と あま 思 あま の あま こ あま る あま 嘉 あま 地 あま さん あま 不 あま 金 あま を あま 借 あま へ

鬼 あま 若 あま 松 あま へ あま 券 あま の あま 月 あま 金 あま を あま 考 あま へ あま 免 あま ぐ あま 窪 あま へ あま 射 あま へ あま 具 あま 方 あま と あま 先 あま

刻 あま 言 あま の あま こ あま 通 あま の あま 鬼 あま 若 あま 松 あま へ あま 決 あま せ あま じ あま と あま 付 あま ま あま り あま へ あま お あま 柳 あま さん あま へ

実 あま 親 あま の あま 正 あま 作 あま と あま い あま の あま 者 あま が あま 射 あま へ あま つ あま つ あま の あま 禮 あま 文 あま と あま 在 あま 否 あま

振へ出まし七なな何なにも角かくも涙なみだどごとい女おんなを妻つましく園うゑんとと直ただ不ふ

昇のぼねて初はつく正ただ作しやくさん小こ遠とほく園うゑんとと実ま不ふお柳やなぎ八やちさんと

又また唄うた女おんな流ながの方かたう姉あねのお茶ちやの方かた小こ居ゐませうせうが私わたし不ふ取とり

つつのふ仕しぐ志し士し人ひとと言いひひままるるくく然さららみみすすくくままと

七なな三さん郎らうさんさんの形かたちへ知しるるるるがが多たくく然さららしし言いひひままるるくくままと

お柳やなぎ八やち何なに根ねままらら苦く号ごう不ふハハ多たくく此こゝ根ね不ふ年ねん久く積つて

意い気き地ぢがが多たくく多たくく何なにも角かくも思おもふふ不ふ出で来きま

甘あまぬぬと涙なみだを落おちちしし七なな言いひひ成なるるか柳やなぎさんさんの居ゐ所ところも妻つましく

言聞せてまゐる 福えんの方の一件も相談しつゝ 嬢一

がうて何卒お条と申相談を成てよろしくお頼りやまはと

言は成くうらむらむにお業下は成り及ふと請合は来やしと

七ハインもれハ多私が役も七も不談落着てお呉は成このまは

お務の工も様もあひのりへ 電も少私を少後へ入るひくと

男入やど嬢一ふたぎおわもは六五ア又へモ多く七さんも私もお条

極ふは頼甲遊文がうひとわらひと思ひふが来さんのおお

電も不安堵する極ふる門こよへト互不悦び語合ける

第廿四回

再また却また院いん富とみ戸との草くさ庵あん火ひか時ときがま戯あそ且まのあふふとうとうのを

湖うみくくお八やち重ちゆうふふ心こころをを改あらためめささせせ母はは親おやへへ孝かう行ぎやうををささるるををささるる

又また母ははをを勸すすめめししがが是こゝもも宿しゆく世せいのの縁えんああるるううららにに戯あそ乃すなはちちのの

ささりりかか世よをを惜おぼししむむ程ほどととままをを當あたりりとと思おもひひ一い菩ぼ提だいのの

道みちをを引ひ返かへししるる娘むすめををああららううのの目めににああららるる人ひとをを今いま自みづかららのの

たたるる髪かみのの毛け不ふ義ぎととううけけるる鴻こう田てん笛ふえかか柳りゅうもも同どうどどくく

化くわ粧じやうししくく茶ちや文ぶんももああるるせせ一い二に人にんのの姿すがたををささしし姉あね姉あねとといいふふ

花のついで
あつたついで
好男の
新装





賤いやしくへひのちまひのくことなまひのちをきあかお柳りゅう尺振袖あつそでを着まけせらば

人ひと品しん独どく自然しぜんと野や暮がをまままくく生う得まへへ美み藤ふじけけ花はな

胸むねの温あたた順かみをまままくく野や暮がららくく六むああるるままひひののくくとと男おとこのの所ところ

お八やえ童ことと六む當あ世よ後ごのの洒あ落れるる乙ひま女めのの風かぜふふああくくらら入いて

由よし袖そでのの好い意き身み衣き裳もをま着まけけてて髪かみもも流ながりりのの結むすぶぶ

身み目め六む下した情なさけなな花はなぞぞ自し然ぜんとと人ひと品しん賤いやくくふふぬぬ二ふた人にん並ならべべて

看み方かた時ときへへひひがが且かつをを上うとと見みええぶぶきき正ただみみおお八やえ童ことと櫻さくらのの

花はなととくくくく入いてて六む彌や路ろがが香かほのの匂におひひをを流ながりりとといいへへん

お柳と梅ととて入て人の好接の露をふくむ〜風情を添

たうこのゑ〜お時八着物で完ふ笑ひ 手多くり〜

お二人さまあつらふら旅あふお美衣襟がざわめまきうそ〜

何旅らお顔が何てお存在を成ては姉妹の旅をたのむ

もはへ〜お時さんら多言言の中もを旅あつて

お作て〜お顔が何てお存在を成ては姉妹の旅をたのむ

お身空を〜お時さんら多言言の中もを旅あつて

さん其の〜お時さんら多言言の中もを旅あつて

お景さんの御郷を可憐らしく射すの御縁しども

叶ひませんうら行ませんヨウハアアア貴嬢もて其

振るゐるを御作ておとおのりめも成ませんヨウハアア至然

てんもさるるもせん実るゐるもた美ヲカニ両方て

そあやう卑しをるもて互ふ貴方鏡せし七か在は後て

初ません何をも此兩人も多ク娘評判記とやうかゆ

まはと西と東の大方図で表さるるもはヨウそのお美久藤し

お頼で在るもか八重さるるハ此か頭巾を召ておを

着て居候と云 仰り 情しむ 此子 なるぞい おもさるる まませんら

何程 お美森 くらても 鳴田畠で 生ある 入の とは 頃中を

冠行て お在 生成の とは 何方が お 似合 生成る 由 覧下す

今も 徳せ お目ふ けりま けりま 子 工お 柳きん ト 笑ひま ぐら

お八重 不 正納 文 茶の 縮 縮の 由 なる 祖 頃中を 冠ら せれば

お八重 又 きの 俣 不 冠り 居て や 女へ フホ しく お柳 さん 松 由 多

坊 さん の 方 が 似合 と 生 子へ 入る 然る 念 入る 事 なる 事

ぬヨ 多く 裁 幸と なる 鳴 田 畠 で 生 あり 入 けり ヨト 似 合 たり

垣根の外にて 遠く 山道 下り 若目郡 遠く

るまゝのまゝ。之の道も 成すとのまゝ

せうトトの 國を 家内を 覗く人の

松子と名くも 柵側の 隙の 行へ

空を 押明て 入来る 壮年 遠入 足来 腰を 屈す

遠くハイチト 也免を 成す 遠くハイチ 離人を 成す

ト空途 遠く 松ハ 往來の 者 若目郡

若目郡が 此の 庭の外で 多ふ 病も 瘵の 羅

しりしりまひるら ちん卒 此 此縁側かえりがきの智ちを少すくしの方 此真

まきり 此成て下まら 此まひ 此極ふ 此頼たのひの中まひ 此まへ 此やく 此で

此此産まら 途ちう甲かうの 此病びやうも 此ん 此まを 此固こくを成

まをう 此遠えん 此多たく 此方かたへ 此連れんやと 此出でるまを

此湯ゆも 此漸ぜんて 此在あるまひ 此あ 此葉はでも 此上あるまへ 此直ちく

此まひ 此ヨト 此やま 此言ことまふ 此彼かの男おとこの 此大おほきふ 此脱だふ

此まへ 此まひ 此有あるまひ 此おまら 此まひ 此左ひだり系けいを 此少すくし

此のま 此卒しゆ 此頼たのひの中まひ 此本ほん戸この 此外ほかへ 此欠かけ 此一ひと 此程ほど

多くは家へ伴ひ入る。其の病人への如くある者を見れば

は庵のお八重が、あつち まご まご 新川の土着の

群を以て隠居所を福ひせ保養し居る福を仰ぎ

け且だ隣りの内より透見せし七ありけるが八重は

物り〜まご まご 言ひく欠出んとせしが遠くへ七は

ひそくふ^{まご} 叫びけり まご まご 然るうでさるる中久下老

出 まご まご まご 所遠くへ入らせんマア まご まご け間へ

お出るまごのまご〜ヤレ〜とせし所 まご まご 獲る身でまごのまご

ごちんやう

ちん

まうー内持病をくぐ直ふお落つるまをさうマア

まき

やま

まき

まき

まき

まき

おーおをとお休めを成すーおぞお薬のお持合

おまのまひ入下おまのまひ入下きーなるおまのまひ入下福へイエ

おまのま

病をひるうをぢおまのまひ入下ー送しそ悪ひなま

おま

おま

おま

おま

まうー窓早天まふ特もそふぢおまのまひ入下お様ひ

おま

おま

おま

お下まひテトひ所人お八重入る矢の方よりま出

おま

おま

おま

おま

おまーそふ福之助の側へおま

おま

おま

おま

おま

お園のまをのまをさうまふ梅のまをこやまひ胸の

こまき

まき

ひらくお掃市こまきありまきお上りまきを成日まきせんりト

きーまきをこまき射入まきお祈まきへ茶市まき院へ白湯まきと汲まき来る福まきの助まきハ

即時まき出来まき合まきのまき虚痛まきゆまき糸まき上まきり福まきへまきおれまきへ存まき念まき

かけりまきるまきひまき西まき分まき袍まきぬまきるまきりまきままきうまきてトまき言まきなまきぐまきらまきおまき八まき重まきのまき

額まきを見まき上まき福まきへまき貴まき嬢まきハまきうまきうまき先まき達まきとまき松まき山まきのまき名まきをまきら

福まきのまきあまきさまきるまきぬまきのまき途まき中まきへまきままきへまき二まき貴まき嬢まきハまき難まき波まき田まきのまき

お寺まきでまきお目まきふまきらまきるまきてまきらまきるまき時まきおまき相まき見まき思まきおまき慮まき不まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

お寺まきでまきお目まきふまきらまきるまきてまきらまきるまき時まきおまき相まき見まき思まきおまき慮まき不まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

落まき吐まきしまきをまきりまきしまきしまきとまき次まき郎まきをまき哀まきままきへまきままきくまきままき二まき然まきをまき有まき

たつひよりへまこと實ふふ不ふ思ふ身ふなるふりて又ふお目ふふふらふとふ及ふへ

交まトまヤまクま猶ま文まのまりまおま心まをまままくまおま体まをまままらますまト

言まるまらまうま福まとま助まのま類まをま後ま容ま見まつまらま行まつま思まひまらまう

身まのまてま實まへまマまアまおま大まるまのま心まをま成ままましまヨま即ま時まおまままとまおまを

よまくまおま活まらまうまをま成ままましましまとま六まのまりまらまとまおま目まふまらまらままま

ままとまらまトま入まるま心まをま福まとま助まのま類まをま成ままましましまとまおま目まふまらまらままま

病まのま由まるま心まをま保ま養まとま類まをま成ままましましまとまおま目まふまらまらままま

公まよまうましまとまいま言ま終まくま暫ま日ま時ま苦ま痛まのま体まふまらまらままましまとまおま目まふまらまらままま

おぼろのつるこのふみ米きまの坐しを團て福の動

お八重やまお柳りゅうを片へん時ときもたあぐ見みまかたふゆ

言ことといふ公こうの知ち道みち一ひと男おとこと連つれて此こゝ庵あんの移うつりせ者ものふ

来きりりか次つぎ郎らう者ものが俄わづ小こ思おもひひ分わるる勁きんめめ依よて

虚け病びやうをを矣や一ひと側かた近ぢかくく寄よりりののせせきき一ひと多た

斯するるののとと露つゆややもも知ちららむむ入い来きるる米こめをを又また七しち三さん郎らうも

糸いと者ものもも玉たま八はちののろろととももお柳りゅうふふ逢あいいとと相あいいひひせせぬぬ一ひと此こゝ

程ほどお柳りゅうをを世よ活かふふ多たくく返かへりりののかかめめ七しち種しゆのの玉たまをを

物ものささとと持もちまましし先まづおお時ときをを恨うらみ出だしし先まづ逢あはあしし長ながく

厄やくぬぬままりりししおお折りののるるをを厄やく男おとこ女をんな一ひと同どうふふ礼れいをを渡わたせせれれ

おお時ときもも相あいいふふ會あいいひひししととままいい入いりりももああららううをを成なすす

ままささににささたたくく此こゝらら人ひとトとのの時ときもも福ふくとと偶ぐうふふ来きりり

次つぎ郎らう者ものをを兼かねてて米こめをを食たべべとと公こう易い為ゐけけしし六む勝かつるる良よのの服ふく多た

ままいい出でるる笑わらひひをを多たくく一ひと人ひとににああいいははははししまますすとと先まづににおお折りのの時ときもも

ままいいににああいいははははししまますすとと先まづににおお折りのの時ときももままいいににああいいははははししまますす

那あののの折り人ひとおお見みええるる事こともも初はじめめとと思おもひひののてて居あるるののごご何なにれれががええ

續つのこかこ全こ校こクこ子こトこ言こ入このこ次こ郎こきこのこ宋こをこ受ことこ由こ氏こ

根こ二こ出こるこのこ名こ創こ近こくこさこらこみこ守これこバこ次こ郎こきこのこ宋こをこ受こ

耳こ不こ口こ公こ受こくことこ宋こをこ受このこ受こらこみこクこ宋こハこイこヤこ父こ受これこハ

宋こをこ受このこ善こ良こ那ことこクこドこレこクこ受こらこみこクこおこ目こ不こクこのこやこせこう

トこ宋こをこ受このこ生こまこくこおこ時こハこ内こ終こまこれこバこおこ時こハこ善こ良こ

おこ八こ重このこ疾こ入こ多こクこ福こ之こ助このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向こ

宋こをこ受こハこりことこくこ福こ之こ助このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向こ

女ことこ思こハこ外こかこ八こ重このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向このこ方こ向こ

難波田の寺あり築あり稲藪あり馬指の逢坂のりり全

世の物束めて神と佛と引合せゆゑ知る意の路の

發うしりのるるべしと感心し元來産持の上より者

るまゝとるゝぬくーぐらぎらぬふ其座を取持て物々

お八重お柳福之助次郎お時と片側ふ居るるる

七三帝王八条寺を片ふみ^{あき}物ももうち解と語合

振ふ面白可笑とつとらふ^{たてまき}来をまの筋へ管もつさ

世の骨ありめて此席めぐる^{いさやく}一の大役もらんり^{うき}形て七三

部と米をまがいつ時の間あう誘合一能へきうしる
料理の穀を尊戸の茶をよう持来れべされよりの
駈いしく自分さ度酒盛とらきうふける

は後お柳の福と助の本妻とまりお八重は福と

助と繁りを結び源さ中とまり母親も業知るれど

親類ふ彼を評判を乃らうるりを存疎ふ一旦

管次帝といふものふま婿の癒せ結びはま一人へ負

播を立て尾とまりしもの今更箱と助の本妻と

ある福を働かぬをいふ事なくなく所貯る所あり

先^先に親ふお柳と本妻と一けりぐお柳へお入重と柳と

親^親の睦^睦しく語令一年の中ふ一月の二月の外の

をあれて住居しるのみく大方へお入重と同が所不後し

。お七^{お七}と^とお八^{お八}の^の睦^睦の^の実^実家^家へ^へ嫁^嫁と^とお八^{お八}と^と睦^睦と

女^女房^房と^と一^一玉^玉八^八ハ^ハ糸^糸糸^糸を^を嫁^嫁娘^娘と^と睦^睦終^終睦^睦しく

婿^婿娘^娘の^の睦^睦と^と一^一玉^玉八^八ハ^ハ糸^糸糸^糸を^を花^花と^と一^一糸^糸と

あれも目出度程の^{まが}と^と一^一玉^玉八^八ハ^ハ糸^糸糸^糸と

猶此外まづは杉坂ののうなまあらひて嘉嘉らが酒其の体をあ
席の側の女ののりりと競終とらざる條下もあり且正直
正作が身の活り若弓續ると三圖の編むの術
利益を論ずは草紙の説をとらるるの日の
中に於て一つの要を摘んで早く
巻を修むのこと

鹿漏先生
鳥永春水述

梅の春卷之十二了

4000

